

## 遅しく、そして優しい郷土

山波を背負った坂田の空はどこまでも碧く、丘陵に密集する唐椎の葉は濃い緑に染められていた。ところどころに宅地開発の跡の土肌がわずかに散見されるけれども、君津駅北口前のロータリーから眺める坂田の森はみずみずしく、牛の背のようにゆったりとしている。ここに住む人々の様子も生き方もなにもかもが変貌を遂げてしまっている。このように、それは昔ながらの母の懐ろのように温かく、優しい想いを抱かせる。

麓に細長く居並ぶ家々。モダンな新興住宅がつつぎつつぎと建設されるなかに、いくつかの旧家はそれぞれの重みをもって混じっていた。たとえその旧家が時の流れにつれて新築されていとしても、敷地を囲む背の低い唐椎の生け垣、あるいは庭先につらなる小さな畑地の様子で新興住宅との違いはおのずと識別できる。昭和五十六年初夏の雲ひとつない晴れの日の風情である。

東京駅から国鉄総武線の千葉駅で内房線に入ると一時間足らず。木更津を過ぎ、さほど長くないトンネルを二つぐれば、そこにはもう君津駅のプラットフォームがくつきりと姿を現わす。車窓から周囲を見渡せば、右も左もまだ開発途上の地方の商住工業都市の趣き。四、五階建ての大型小売店や地方銀行のビルディング、さらにはようやく土地の人々になじんだ市庁舎のスマートさなどが目につくが、かつての広々とした田園の面影はまだすっきりは消えていない。つい二年前、この君津駅は国鉄横須賀線との直結乗

り入れが実現し、市街はいまひとつ弾みをつけているようであった。

君津駅は昭和四十六年に橋上駅となってまだ新しい。その北口に出ると、前方一帯がわれわれの住む君津市坂田だ。房総君津市西部の中心に位置し、総面積約二〇〇ヘクタールの正四角状の地形は、四季を通して温暖な土地柄である。わずか十四、五年前までここは丘陵地に抱かれたのどかな田園と潮の香もなつかしい海岸に面した農漁村であった。明治、大正時代までは戸数も一〇〇戸あるかないかで、周西村坂田と呼ばれていた。しかし、土地の人々はめっぽう仕事が好きで、しかも研究心が旺盛だ。とりわけ坂田海岸で見せた海苔養殖業の技術改良は全国の浅海漁民から大いに注目され、「上総海苔」として親しまれた。

現在の君津駅前に広がる東坂田、西坂田の商住地帯は、秋ともなれば黄金色に輝く稲穂がさざ波のようにさわやかに揺れ、見渡すかぎりの田園風景であった。人々は初夏から中秋にかけては多忙な農業にいそしみ、秋彼岸前ごろにもなると早くも海苔網の準備にとりかかる。秋祭りの十月十五日が過ぎれば冬の厳しい潮風に頬を紅く染めながら、彼らは一心不乱に海苔養殖事業に取り組んだ。正月の十一日は「浦祭」、秋には八幡神社の大祭とあって、「馬出し」という独特の祭事を催した。この日ばかりは長老も若者も区別なく、無礼講で豪快に酔いしれたものであった。

そして昭和三十年代の後半、房総の一村落として平和な日々を送っていたこの坂田の地には一大異変が起こった。千葉県当局が進めた京葉工業地帯造成の勢いに乗って世界最大規模の製鉄所が建設されることが決定したのだ。君津町地先の海岸一帯を埋め立

て、そこに世界一を誇る新日本製鉄(当時は八幡製鉄)の君津製鉄所が出現するという。坂田は蜂の巣をつついたような騒ぎとなり、揺れに揺れた。

漁業権放棄の要請、かたくなな反対、いく度となく繰り返された交渉のすえ、隣接する君津漁業協同組合がついに漁業権を放棄し、進出企業側に周辺の漁場を固められた坂田漁業協同組合も、昭和四十年五月二十六日、やむなく全面放棄に踏みきったのであった。

埋め立ては急ピッチで進められた。それと併行して君津町当局は「水と緑の豊かな田園工業都市」の旗印を掲げ、新しい町づくりのスタートを切った。町の中心の位置にある坂田がその渦中にのみ込まれたのは当然の成り行きである。それが厳しい時代の流れなのかもしれぬ、と割り切った坂田の人々は「百年の計」のもとに坂田土地区画整理組合を結成して、この激動の荒波に果敢にも挑戦したのだった。

挑戦者たちはすべて素人ばかりであった。それはそうであろう。つい先日まで海苔網をたぐったり、田畑を耕やし、きわめて単調で平和な日々を送っていた人たちだったのだ。しかし、いったん漁業権を放棄し、そこに世界最大の製鉄所が完成するとなれば、当然、この一帯は、いわゆるデベロッパーと称する開拓者たちに、それこそ無秩序な開発の手にかかることは必至である。そのあと一体なにが残るというのか。坂田の人々は、自らの将来と子孫たちへの遺産として、健康的な都市づくりから自らの命を投げ出さざるを得なかったのである。素人の挑戦者たちはさまざまの体験を試みた。そして、ひとつひとつ健全な都市づくりの手法を会得し、ついに「坂田開発方式」なる独自のものを確立した。後年、この開発方式は、日本でも有数の学術会議に提出され、ひとつのモデル

として注目を浴びたのであった。

坂田の世帯数は昭和四十四年五月、すなわち君津製鉄所第一号高炉に火の入る直前はわずか一八四戸、人口八〇九名にすぎなかった。それが五十一年六月の調査では四六四戸、一七一名と増え、昭和五十六年八月には八五〇世帯を越えている。この数は君津市内において屈指の自治会である。いま坂田の自治会は、坂田土地区画整理組合を中心に市街化と生活条件の整備に余念がない。旧住民と新住民が一体となつての町づくり。懐かしい「馬出し」の祭事も、「浦祭」も時を合わせるかのように自然消滅したが、自治会を中核にした盆踊り大会や秋祭、体育大会などの行事がそれに代わって登場し、人々は心の交流を深めつつある。坂田に起こつた激変はこうして住む人々も、土地も、生活も、はたまた文化までも発展的に新たなものへと衣替えさせたのである。

坂田丘陵の一角には見事な学校群がそびえたっている。そこには坂田小学校、周西中学校、君津高等学校をはじめ大和田小学校など近代的な教育施設が建ちならび、そのかたわらには、農漁民の子弟たちの教育機関として君津総合高等職業訓練校があり、すべては坂田住民の多大な協力の賜ものであった。各学校はいま、あたかも競い合うように生徒の育成に余念がないが、いまや坂田は文教施設を備えた新しい形の商住工業都市といつてもおかしくはない。

それにしてもこの十四、五年の歳月は矢のように速く、人々の記憶というものは実に不安定である。坂田の旧家に生まれた青年たちでさえ、すでに在りし日の郷土の姿を忘却しつつある。小・中学生にいたっては、おそらく、悪戯いたづらものの小スズメやカラスの権

兵衛が飛び交った実り多き田園、遠く関西方面から海苔種を買い求めにやってきた漁師たちを交えて活況を呈した海岸、そこで力の限り働いた先人たちの生きざま、いずれも残されたごくわずかの映像や資料でしか知り得なくなっているにちがいない。

無理のないことである。海苔養殖業に従事し、その年の作柄に一喜一憂した老人や中年の人たちですら、あらためて自らの往時を振り返ったとき、彼らの脳裏にはやはり濃霧が重くのしかかり、記憶のほどが定かでなくなっているのだから……。

しかし、すっかり塗り替えられた郷土・坂田ではあるが、ここにはまぎれもなく遅しく、優しい先人たちがいて、そして歴史があった。

房総地方は、わが国の歴史舞台においても、つねに重要な拠点となっていた。時代をさかのぼれば、大和朝廷の蝦夷征伐においては、兵士や兵糧の重大兵站基地となり、やがては桓武平氏のすみかとなった。平将門の乱、平忠常の乱、坂田における資料はまさに皆無に等しいが、伝承などをたどれば、郷土の農民たちはじつと耐え忍ぶ日々をくり返してきたにちがいない。

一説によれば、坂田の字名には右馬ヶ作などという地もあり、この地がかつては軍馬の供給基地であった名残りである、ともいわれている。平氏打倒の旗をかかげた源頼朝は石橋山の戦いにやぶれ、命からがら安房にたどりついた。上総、下総の武将たちはこの公達をたてまつり、鎌倉幕府創設の原動力となった。そして戦国時代には、里見氏と北条氏の戦場と化した。庶民たちは根強く生きながらえてきた。

きびしい大閥検地に対しては村人たちは身を寄せあって村を守り、そしていつしか秩

序ある坂田村を形成していった。

江戸時代の古文書や古絵図によれば、坂田農民は厳しいながらも、ようやく安定をとりもどしていたようである。大草平内とか大牧新左衛門といった当時の村を取りしきる地頭や村役人にも恵まれ、温暖な気候のもとに先人たちは協力し合いながら生きていた。険しい世上の中にあっても村人たちは、信仰心厚く菩提寺建立に力を入れたり、一方、若者たちは元気のあまり、祭でない日に神輿を出して御陣屋の叱りを受けるといったこともあった。

明治に入り、村人たちは従来の農林、雑漁のほかに海苔養殖業という新しい収入源を得た。そして彼らはこの海苔養殖業の研究改良に勤勉であった。さまざまな種網を発明・改良しては、近隣はおろか全国の海苔養殖業者を驚かせたものであった。農業と海苔養殖業を兼ねた時代は、それからほぼ九〇年は続いた。村人たちはたとえ貧しくとも働けば働くだけ収入を得ることができ、それは生きがいのある郷土であった。

その祖先たちが長い年月をかけて築きあげた貴重な、かつ偉大な遺産が基盤になって、この田園工業都市の形成を可能ならしめたこともまた疑いのない真実である。大正・昭和になっても、仲間たちは精いっぱい力を合わせた。部落を、そして村を愛した。かくしていま、残された時間がそう多くないわれわれは、坂田のたくさんの子孫たちについてまでも郷土をいつくしんでいてもらいたいと、強く願わずにはいられない。